雅三俗七錄

貳

特別
14
1919
171

176448

○漢文の爲哉平也と謂ふの後に古經を
書する等を秦漢以上を言文一段にあつ
たりと雖秦漢儀の新說の混淆せるものを
の現物を宮さことう出来ず　九經ひ古傳說
五家史記及び志藏中韓の佚するものを
各々一家の文章を等しくその說例
の多く同じ[illegible]ものあり　もつて西晉の
書を五胡の亂をもつて南北の間を立
り降て唐末五代を宋元清に及ぶまで

38- 8970

中国を基く外来の紙幣さえ紙幣の二字
清を又を通ず現今の新聞日用の行文は全
く古文を陽離する事あるに、此こう来清
以後の文章を立行の体を長短を表す
るみな助辞を用ゆるひとく、全く死
式の助辞を換用するのみ、韓柳欧
蘇と異なる程なれども況んや清人やこれの
文章の格をやこれ
○立文一段ならば狂詩
である、狂詩を一段体の詩ひあるも
俗語を入れて構へるひとく、寧ろ全く

東京東京東京

正詩の調を離れたるものを以て此の体の上乗と
して居る、例へば元の白氏の長恨歌の如き
流行した狂詩の中に忠臣義士八百の詩
詩ある、それは陸地猫迷富士詩とか
うもうぶんを正詩と迷いこむ事もあり
詩の立ぬと考へるに、これは文しの西山科
の俗を然しに一聯に誰知小浪祝言歌、即
是大星出生時とある事を寧ろ狂体と言へ
ることする、そもそんな祝言の出生をめ
俗語のまとあるを誰かこれを正詩とま
ぎれうるといいうるやや

○さて前に掲げ置きたる元分三文一
段の値を参酌して云ひうる風来
山人とかの名で著したる茶菓子と云ふ冊子中出
て来る湯豆腐と云ふ七夕長命なる豆腐
三文一段のものを酒肴として即ち鄙鳴湯
屋戸初開、三助早已朝飯傾と云ふ句を起し
御免蒲田食物、元祖即丁稚大工兄、温手熱手
鰹の叩、填分注分嘯々鳴て言ふ通い
ひたる日こ
○狂俳を俗語を用ひること高尚なる詩を用
ひたるを得ず、而して此の

狂歌の意味の活動を異なる
例を挙て、「ひとくさ」、「ちくさ」、「森堂」、「高
つくし」の一節を抜出す
狂俳を俗語を用ひたる詩文を訓文を高
たる結句を用ひるべし、行つて近年の狂
俳を平戸の鰹叩やさうめんやけんと云ふ
歌平戸の法を達へさうき有る歌を用ひ
ること心して平戸の言を撰びし茶菓
子の中に「今は昔」の七絶
を掲げたる一例を挙げ
吹軒文庫早帰、黒主居眠退屈人

素撲俗正六便行　業平前握ル所手

角よりくくるのかうは物の字をゆんび
仮字をそうの字の辛の字を用ひそ
又俗正の字を仮字を花び敷を正月の正あ
れハ之を平用もそくくるを必ずも本義のあ
を論せそもの字を正と異る物
そくそ、さを前の仮ばくそくるくくを用ひて句詞をうひ
ハ毎日之字俗語を用ひて句詞をうひ
弾ハ八弦仙を詠して字を高字を
を鉄も意味を通じて物改をを意
をして字出る所字を、一般の字排面と謂

東樓原製

如可し
替字を俗用をを別式をを有る者け
をはテニヲハの俗を代る名詞
の略ををを次のを名詞を代る字詞
の略をを例ば四人の脚くを結
編のケダシ（跳出しの義を）といふ物を
一字をををまるみケダシと訓する名
詞の蓋の字を用ひて継綴編蓋とする
うめし所をを字も出通して云ん
さをを俗人の撲ひうを
勘平切腹故（かるがやをを）を對して

半七欠落甚（はるはたし）

の一聯まを後世人名とその原因

動作を示す類型軽妙八北上さるべ

凡を詩の句ふを又ふ所作とうあるべんそ

あの巧拙まてぬ句ふ所もうあるもまるる云

云前の対句ふ乱れまるは才立やうの面白ふ勘

平切腹と半七欠落とは通常の法度ふを

地と甚の面白を後へこんの面白

法動し来ふ、れうる勘平とおそるべき七

とう反行きの状を表ひ出し名優う義

義清ふる所作をおはうけるる心地せる

のん、是ふ作者う巧に一ふる義の妙用と

いへけん

○高家の俗語ひて「サバを読む」といふことあ

るるを大反中ふる多くふる魚屋をして五ツ多ひふる三ツさえ言ハぬ

と云ひ強ふる胡麻化すことを云ふのあ

るが高貴反る因て賢しひふる

魚屋を高人の猟師ふ論るるあ

るるを其の清ふることこのふる高家

俗と語ふる為ふ文義ふ異り情ふ利

対する載つてゐる

玉子の伝説で「サハを捨てた」といふ彼の胡麻化しを行るのが往きあつて、十個宛で五きゝゝゝゝ「元手」と言いたいとこるである、えんとえば考へる「お釣り」と言ふ事、此が十個宛つたとう八個宛つたとう云ふ勘定八海苔う玉子といふ云ふ事の方が後、幾らゝゝゝゝ文字三の三つを代る代るつたと思つて立ちゝゝが、高うこんな大きひて勘定をチヤレト十個丈けの勘を云つて●のびあるいうしと云ふ事ばかめゝゝ何う

東京博覧会

玉子を入れたチヤレと言つてみて彼は、仮名を振つたのを数取りを立てゝ、ひとゝゝゝゝ振ゝゝ方が好ましくて七、六文の玉の後、ゝゝは玉子をしたゝゝ玉子を入れたゝゝ言つてみて而して数字を云るのあるこれの用ひし何の勘が玉らと言ふ意味を決して附けて言ふ故

●高玉の振仮名をゆえて云ふ意味のあるゝゝゝゝがある

○西姫の生まれた我国を知れる云ふ事「貴女之反」、まゝゝゝ西姫の振仮名ひとゝゝ客

サッリ法でなく、古くからいまだ見しこ
とまれなり、況為論者の言いたる人に
ヨ為を知るの識論の如く実の手あと
して往々の面白き方法なりけれども面
ベッサリーと云ふ面白き業のことなるべし
書いてあるそうして貴女之反と云ふ業も
えんと同様の方法と説明してあるのみ
其の性質の一端を知ることを出来た益
もベッサリーが今日迄知られる業の
内でも最も効能且つ安産なるを
うたいりもべッサリーと云ふ

（一名安全法）（姙娠）とすることを云ふ故に
能書の文句を書き底う況して産婦
を安産ならしめるものなれば
人、左の説能書の言を掲げ其の大要を
示す

第一ベッサリーの性質

ベッサリーは ユコール状の物質を以て調製
したるものにして人体の温度に逢へば能く
溶解し其の液は精虫及腟内の
雑菌を麻痺せしめ其活力を
失はしむることを以て安全確実の

東京博覧会

さうめしかるに欧米の文明国にては雑毒の
毒ある婦人助膜炎肺疾の如くなる婦人
姙娠を信ずる者多く病の癒ある婦人又は男子
子の産まれる中必ず胎の云ふ所にて風のごとく
生ずと云ふ行はれ云ふべし

第二 ベッサリーの效用

ベッサリーは世界中文明の国全国姙娠
産婦にして之を使用せざる者なく之を
使用する者天然の時果を全ふすることを
得るの三徳あること

(一) 最も婦人を利益する

(二) 病毒の伝染せざること

(三) 男女共に完全なること

第三 ベッサリーの沿革

ベッサリーは独乙の業博士アントニー氏
の発明にして之を博士エルンスト氏の表
面に改良を加へたるものなり元来毒
を注射するを以て毒を注射するを
又ゴムにて作るアンニーペサントの共説
書に依れば世界の各邦に起る
人口減少の原因は生殖の危難なるを
此の一新法にて之を救出し

効しと

第四 ベッサリーの用法

ベッサリーは内服するも外用のお
よび黄色みなる粉末を元障き而しも婦人の
方の局部に挿入するに体温を保りても
八一分内外にして溶解し車のまゝなる
時は微温湯にて局部を洗浄する或
は拭い取ると一つとまんべんなく之を点ずる取
七人身を変ずし又溶解は内外にて
其の効力を失らず

第五 ベッサリーの代價

一半ダース入 八十銭
一一ダース入 壱円四十五銭
一一ダース入一ダース 十五円
以上

醫学博士 アントニー氏
法学士 岩村 清

「貴女之友」を発行する大阪市東区淡路町
五丁目 貴女
之友社へベッサリーを御申込
と必ず
○なるべく多く伊國の軍艦を買つて手

日際をテコツト出巧うつて殺だどうせうと賣買の
九分通りまで言賣の話を進めたるなる
横合ゑまりたる取つたる、或る人の說を
ちらと露國を延べ金を出ひ話あり中ひ出つたと
のをりたる三日間の現金支拂ひ取つたと
言の事なれや、勿論三日間の手數料上の金
を拂ひたるなれば因つたる事なるべう言
ちらと日英同盟を結ぶ新聞のあり、何れ英國
の力を借りたる為なるべし
○日露開戰の準備の京城居留の京人
職工の連盟を急ぎ空を拂く

東京博文堂製

て繩をちらと結ぶ近所を思ふ所ひ言ひ
正人の伝しを言ふ言葉金職工の連
盟の拂ふ言ふ言葉金職工の連
盟を拂ふ言ふ言葉金職工の連
○朝鮮開戰の先
○朝鮮開戰の準備の出来ない、又
出来ない出来ない、實金職工の連
盟を拂ふ北海の準備をするのと京城の
ある、ある言ふ言ふ思ふ
○京城居人と言ふ言葉勿論士ちゃの紙
上後く奇談の話を掲げ一部淡者の噂来を
傳し其の名を傳す、明治維新時人と言ふ

一人命を若つて其の言ふ所あらざるなきあり和
死んでも論議を断ぜず正を得て帰結学
る深き利欲誘惑を去すべうして、聖の人
の甚だ風刺の去すべきの人、経津現在
の議論の去すべき人のあるさまを、然れども人の論
今も亦幸にして拘しては以て笑ふべき世なん
歟男女の関係を見る四
人間を生物中最も高尚なるものとなすも淫慾を満動物中最も甚しきも
といはざるべからず金を断ずる人間の淫慾
は天命なり有らざるべからず、と雖も之れを統御す

東京博覧会

試み人間以外の動物を見よ其交尾期の一
定せるものは多くを命令に従ひ交尾期一
定す生殖約束経て一定するが彼の動物
は北の交尾期に於て如何なる動作をなす
其の他の時に於て雌雄共に交するの情を
示さざるは動物の情を見るべき
然るに人間を以て動物を以て
為す勿れ

……

動物の人間動物の淫慾なる程度の高
きを喜ぶ淫慾をこの淫慾をゆる

天然の性情を保ち進化論の一部を発表せ
ざるべからざるものや

◎第一家族の基礎なる夫婦人間生殖を主
として生命維持を計らんとする欲望
を満たすべき外寇の防禦者たる指揮の権柄
を握る一族を固結して動かすべき起因たる
男女両性の義務を和し外国の侵略
を防ぎ生命財産を育成の
活を保ちたる人間の危険を除き天然
の法則を之れを言うべきことなきを能わず

東京 株原製

自然の源泉なるべし

◎若し人間をして今日のごとく家族をもしめざる時は六尺
の地延の花らしめば終に外寇の侵害を免
れざるべし育児上天性の母子の愛情
を自然の動作を出現する能わざる
もの必ずしも推測し難きなり
如何なる時代の人数を抵当する男女の
関係を社会上の法則の推断
の誤らざること疑うべきなり

◎更に婚姻歴史を考うるに思い半ばに過ぎる
つまりウエステルマルク氏のごとき

の人種ごとに交接の行なわるることを云へり之れ実人と同様なり

若者を求むる人は後宮の設備を固くし

女の慰安を求ること二回なり　人工美の誘惑

を求ること四回なり

回　以上述べ来りし人間の深欲を満たすに和的

の施設の如き之れ皆な天然なり

回　金を以て人間色欲の満足を換ずる

小交換所を一年間一期間を以て開設する

天然なりと云へども其の理由を述べよ

回　人間の姫姫所を十ヶ月より一年の十ヶ月後

東京帝国大学図書館蔵

まで姫姫所を設置し交接

の設備をなすや或は姫姫所を廃止し

妨げなきや之れ如何なる理由を以て

ある上に生殖上生殖上必要なりと云

うべきことを要する所の等動物と異なる之

を男女ともに大猫の場合例

を見ん人の例を以て説明せんとせば如

考へて人男の交接を一年一期とし

てもさまたげなき為に二期あるときは

姫姫所を四ヶ月を超ゆべう

らざる為に日数六ヶ月を超ゆべう

下等動物の実例

[illegible]

曰く人間は諸動物中最も淫慾の旺盛なるものにして而も其慾情は天然に背く、第一家居は人間をして天然の制裁より自由ならしめ從つて淫慾を濫發せしむ、第二人事復雜の結果其慰安を求むる事大、從つて精神的慰安と共に身體的慰安を要求するに至り茲に淫慾の濫發となる、第三女子の人工美は男子の色慾を挑發せしめて色情の濫發を來さしむ此三者人間をして相接するの

期節を失せしめ其の色慾をして天然に反せしめしものなり、故を以て人間は宜ろしく一定期節（春期）を定めて相接する事と爲すべしと

此等の諸點吾人は未だ深く攷ふる事なきが故に俄かに贊否の意を表するに由なけれど主人の言恐らくは一部の眞理あらん、唯稍〻疑を存すべき點を擧ぐれば左の如し

抑も人間の活動は一方に於て本能的なると共に他方に於ては意識的なり、從つて其生殖上の活動に就ても此兩方面ある事を忘るべからず、動物に在つては其の生殖慾の活動は抑制も、濫發も共に本能的にして意識的ならず、單り人間に在つては其抑制も濫發も本能的なるあり、意識的なるあり、決して一概に斷ずべからず、去れば吾人は人間色慾濫溺の場合には意識的濫溺と本能的濫溺とある事を忘るべからず、素より此兩者其の間に截然たる區劃あるにはあらざれど大体に於て相分たるゝ所あるを見るなり、而して本能的濫溺は人間の動物的方面の活動に屬し他動物に於けると同じき趨向を以て色情に濫溺するものなり、主人は動物に色情濫發なきが如くに云ふ、然れどもそは絶對に本能的なる生物に在りては其の本能の働き人間のに比して規律的なるが爲めのみ、猿類其他の高等なる動物に至つては往〻色慾濫溺なきにあらず、又家畜に人工を加ふの要ある際に於ても能く此消息を知る事を得べし

意識的濫溺に至つては人間の特有なる事論を待たず、個人意志の修養、社會制裁の束縛等は現に此意識的濫溺を妨遏しつゝあり、然も主人の言ひし如く人間に特有なる種々なる事情は此意識的濫溺を釀しつゝあるは事實といふべし

然れども人間色慾濫溺の多くの場合に於ては本能的にして意識的にはあらず、否多少意識的なるも其の根底に於て本能的なるを多數とす、本能的なれば則ち動物的なり、色事濫溺者を檢すれば其亂行の本能的と認むべき事を發見するもの多々なるべし、從ふて其色事行動極端に奔れは全く動物的となり性慾は純乎たる動物の夫れに異なる所なきに至る、人間は色事に濫溺すれば動物に近くなり、主人が人間を以て動物よりも淫せりといふは失當ならずや

或は云はん動物の交接には季節あり人間に之れ

なきは甚だしからずやと、然も斯は素人間の動物に比して本能的なるの程度輕微なるが故のみ然も他方に於ては色情的人間は往々季節の支配を受け其季に於て慾望旺昌となる事殆んど動物に似たるものなきにあらざるなり

要するに人間が色事に淫するは決して人間的方面の活動にあらずして却つて其の動物的方面の活動に屬するなり、意識的溫溺は寧ろ實際に於て夥多ならずと見るを至當と爲す

主人が人間を以て生物中の多淫者と說くは其兩性相接するに季節なきを以て主たる論據と爲すなり、然も是れ主人が生物學上の現象を大觀せざるの謬のみ、生物は劣等なるもの程天然の束縛を受くる事甚だし、植物は季節にあらざれば發生せず、生長せず、開花せず、結實せず、上つて動物となれば較〻之れより寛なるも猶多くの點に於て季期を有す、獨り人間に至つては天然期節の影響頗る微小、殊に高等人種に於て然り、人間は植物に於けるが如き發芽期なく、落葉期なく、動物に於けるが如き脫毛期なく、落角期なく、唯四季の中何分か之れに似たる跡を示す事あるに止まる、從つて生殖に於て亦然るは是れ素と理の當然にして、天然に對する抵抗力の再かく著大なる是れ人間今日の繁榮ある所以と知らずや、人間にして若し今少しく天然の影響を感ずる所深からしならんには決して二十世紀の文明を見ん事覺束なし、尤も人間と雖も或る程度に於て大に季節の影響を受けつゝあり出產が統計上春冬の交を以も最多數と爲すが如きを見ても其一斑を知るべし、然も人間進步の徑路は斯る天然の勢力に打ち勝ちつゝ進むにあり主人が人間の交接期を定めんとするは社會政策上或は面白ろきことならんも、其言ふべくして行ふべからざるは恰も常磐木をして落葉せしめんとするに等し、恐らく梟なき事ならん

又主人が一夫一婦を以て一切の動物を支配する天則といふは明らかに生理學上の現象を無視するものなれどそは餘論なれば今贅せず（初）

○猿猴の說と人間と共同の祖先を求し給ふ

一つ〻[illegible]おろうなる[illegible]なること[illegible]
こゝに血液説とゝくる者の試験法四箇ケ
条を挙げ、地の手あるを人猿の如き
一説を立つることを得たりとす、その試験を
施すに無味なることゝして、当刊行の広告
中の「進化論講話」是、なる方然を参ゆあ
れば有なる如ちん
血液は元来造物主の霊妙なる
生命の血球なるものあるが
人間或は其他の動物に新鮮なる血液
を所有するコツプを暫時拡充し

くと立ちて腦のこゝろに凝固する血液も
ゆるゝと共に血管のしぼるを常ひに進行
するものの如きものの澄み出るが是うの即ち
血清なる、初めの血の塊を漸く収縮し
血清を漸く絞りて血清が血塊を
ゆるく浸す様子を作るなり
さて人間の血液を免疫
注射するに当り最先に之を作る
二三日後に再び注射を行ひ又二三日を経て
注射を行ひ六回乃至十回位を繰り注射
を右後に其を形成する辯に血

液うう血清を元とし此血清を牽引の兎の血
うう元つに血清とは大なる性質の違ふこと
を述べためうう牛羊ある迄つに血清を使利の
為人兎血清とを元つに之を人乃の血うう
元つに血清の濃液を混ずうと忽ち凝結し
沈澱う出来て濁る、牽引の兎の血清ひハ
此様なことは決してない
馬の血清を牛羊同注射し此兎の血うう馬兎
血清を明り牛の血清を羊同注射し此兎
うう牛兎血清を造ることいよ拵うと程
の動物の血清を造りし、又程うの動物の

血清うう牛羊を造りし此牛羊の血清
を程うの牛羊同注射し試注して見ると馬兎血清
小馬の血清とを造りければ沈澱を生ずる牛
兎血清を牛の血清とを造りければ沈澱を
生ずること多く人兎血清は人の血清と
混ずるとも沈澱を生ぜぬことは程
ある 即ち甲の動物の血清を乙の動物
う数回注射しなる乙の動物うう元つに
血清を吸甲の動物程の血清と拵合
しなければ沈澱を生ずあといよ性質を
ある

馬免疫血清は馬以外の動物の血清と合しては沈澱を生ずるが如き異種蛋白質の例外なし

例へば騾馬の血清と混ずれば沈澱を生ずるが如く、騾馬免疫血清を馬の血清と混ずるも同様なれども、但し馬免疫血清を騾馬の血清と混ずるときは沈澱を生ずるが如く、豚免疫血清を野猪の血清と混ずるも同様なれども、犬免疫血清を狼の血清と混ずるも其効ひあるが如く、猫免疫血清を虎の血清と混ずるも若しくは沈澱の生ずる動物と

東京帝国大学医学部

動物と類似し其類縁の遠ざかるに従ひ沈澱の生ずるものかと思へども猫の子の生ずる迄のことはかりなり、のみにても縁の遠い動物なることはあるべし

以上は吾輩の研究なり、特に之を研究したる者は吾輩以外にも多くあれども其中の一人は動物の血清をもとるも猿類の血清だけにても殆ど五十種ばかりにも及ぶ人免疫血清と混ぜたる猿類の血清の動物と混じてもあるのみにても沈澱を生ずるものなり、又猿類の中にても若干の猿類の

はゝ或は家を換へたる意の沈淪が生ずる義
ハ〻〻〻沈淪を生ずるものゝ人種若の猩々の
なる血液の混淆を忌み若しい沈淪を
来る北及度〻〻〻度つて度〻と人間と猩々
との類似の点は馬と驢馬と、豚と猪
猪と犬と猫と等が如類似する点と同じ
で、また比較論の方法が、生物学上研究
別の如く出来ぬ位の差異のある
説を換へれば人間と猩々との性質の差
似うるおかれた比較の結果
況や人の方の研究の方法未だ若しいお

也が起るまでもなく人のである
此度のドイツ国出版の人種学雑誌ストラオ
ホとよる人の程遠い生活に関する研究の結果
う載せたものゝ大体は前と同様である
云々
今日の生活試験を関する研究を以て
試験者の人々の動物種属の親
類の淫淫を目的とする主すること出来る
といって宜しい
○日本の婦人方が用へてゐるお
の肌の着けておやしの一つとして

香を印度に産する麝香鹿といふ小
なる鹿の雄の交接器の末端にある嚢の毛
皮の中に溜つた脂である、其の元来の用
は交尾の時節に雌を呼び寄せ其の情を
起させるためであつて其の時節を外れては
至しく香は非常に八九日にのびるといふ、然
く生殖に関係してゐるものが気強く
人間の婦人に用ひられ媚薬として用ひら
れてゐるものも少なくない

〇津軽海峡の遮断によりて北海道にては鬼
に産する松や杉の類が分布されて居らない

すべての植物が大抵似て居るのは寧
ろサイベリヤのと同じであるとまでいはれ
北海道へ行つて見ると真に同じであるが、動
物の分布は大分違ひがあつて、津軽
海峡以北は日本国内の動物を究
めて居るといふてよい、丘博士の進化論
に左のごとく云うて居る

我国の動物分布の有様を見るに全
体からいへば支那論アジヤ大陸のものに似て居る
ばかりであるが本州四国九州辺の動
物には日本国産のものが多い、狸鼬

ちなみに支那チベットの方言をもって極めて似たりと云ふ之を日行と足倣する人もあるは信じがたし日本の猿、猪、羊、鹿、狐、鼬、穴熊等のなきを見れば如何なる法を以て海峡を越えたるか動物学上の異なりとする所なり然と一行も言ふべしやはり地方七十里北方の日本国内の月輪熊ひとりこれ北方の異種なるも若し南北の奇観を産する別種

鼬も猪鹿鼬等の多きを見る往昔ひとつゞき陸地ありしやうなれども海峡を隔てゝ雄の山多くして国内のるひある分北海道にもこれを産する事なれども海底を隔てゝ地方と共通なるものなりやはり地方と共通なるものなり所謂峡谷を内地にもこれを産する往昔七種ありしなるべく欠くのべく本州四国九州産の動物にもこれを産する国土のこれを動物といふ

てハ一往も国々のことを伺ふの意と
最も似て居ることと北海道等のも
の似ることも伺ふ通ふ朝鮮支那等の方
の善く似て居る地方のことも動物名称の
皆其侍ふの別名(ちんみし)も変化せず
今日まで続いて居ることしたとえば時鳥の意味
もまたことに有ることの花鳥論ふ又たとえば鶯興
味のあることび且つ時鳥と鶯とのこと
る日本ふ拙著アジヤ大陸の一部びあつ
たことを物語るものなれば必ずこれ本邦のみ
ならず支那朝鮮北海道の間に離れ難き年月を

東京博文堂製

隔て比較的近い時代ふ於て北海道ふ大陸ふ
ら離れて孤立し動物分布の相違
は日本地方今日の通ふなるを得ず
況んや本邦四国九州を大陸と連絡したあ
つた頃ふ大陸と同種の動物ふ在りたが
離れてふ後ふ地方ごとに猫ふ変化
したふ元来くの国々の種類ふ生来ふの
ごとく又北海道の原始的ふ出来た北
アジヤと陸つゝきであつて離れ難ふ
ものなれば原始的ふ異なるまじきも
ふあらう北海道の名称と内心の

激とのことを以て動物とのことを区別する
人々それぞれブレキストンとのよ英名人の初めて
説の所説を採用する動物分布の境界線を結ぶブレキストン線と名づけるが
同じ一列をなする日本辺島が動物分布
学上北線のようなものと南北二組のものと
なるのである実は無論のことは以上の如
くなる点線を一面で共通を解することが
出来るものであるが北部の北海道の北
部とまた南部の琉球の北部とは
ハッキリ分つことを得るのである

○動物分布の境界の見方は魚類の場合
あるいは鳥の動物の場合と後者の方法と後者の場合
ことを用ひておのを同じ若干を示すこと
細微なる若干動物のことを略し稍大きな
ものをあげて新しく言つても貝類の場合多い
貝類のものを行つても殻をもつて棲む
若く蹠のあるものの足羽毛状
附着して中をもて方法また行くことを常
ひあるものの雲丹の時の足を大きな鳥貝
の棲み若いものが猛じゑんえんとも
あるものを生長し終つたものも後者の方

活び移動することアルモ又魚類の卵も
同じく特に丁の近く泥と共に附着して
遠方へ行くことあり北海の魚類を見れば
流れ出でを喜ぶ入れたるとき之を稚
々の動物が出でて泥の中に混じ入れば
卵、幼蟲等の転び泥の中に混じ入れば
ありて云ふ行くことあり
ありて事実活動の有無の如き
魚類の動物を何れも小異あり、同一の
種類の蝦蟇も同じ
詳しくは、鯉魚類を其例とする

東京博文堂製

○進化論あることは化石の説しるべきものの面
白い第一動物の発生を考ふるに活動
有形を見ることあり
凡動物身体の中に間質の部分大抵石灰
質のもの風雨の為
脆くこうるものあるこうる細き泥の中に埋
もれ出でもせずに蛇を崩さずに化石なる
ることあり出来ぬ泥を埋もれる
ことあの庶の為
ことあることこうる大抵竜脳を帝
又沈人比ことあり化石とこうる

岩の中を穿まんとするのこの考を例とすべ
きものも此所にあり
さて此岩屋をどんな者こうしたかと
んとするその間に解答をなるべき
いうべきまむ此質問をしたる岩屋
を徴するべきものも知るべき岩屋全体の
度さきりに数ひ十里以上なるべきこと
と海の底の泥のうゑ稀なる、どんな激
きなる度さ十里以上の堅牢なる岩屋の出来
きるべき所を一要あるべきうう
とも意味ばうぬことにあり

東棲廬製

岩屋を穿ちたる所沈澱した出来たる
物必ず新屋をもつてその毎屋其の出来た時の
違ひあるべきの其中なる代を調べると一屋
毎々あるのおもむきがあるべきなる同じうして一
つもなく、どんな所此岩屋なる者を一屋毎にある
国々の代名を手掛りとし今なる所をある説
べその岩屋を其の出来た時の順序に従う
て重なる岩屋の出来如何ようなるべきま
ひの間を各屋毎に考へる時代を論す
るべき先が全発を大別して始原代太古代、
中古代、近代の四とし更に各代を岩

于の紋を付る紋すの各時代を始めとして動植
物の生存を考へて之を謂
厚薄化醇等の範圍を屋根とすること此
ゴ、極めて大体をいへば此原代の屋根は
化石の出ることなく極めてまれ、太古代には
魚類の化石の出ること、なほ多く
今日の魚類と同じ種類、又植物類も
羊歯の類の化石は中古代にはじめて蛙
蜥蜴の類の化石は出ること多く
とも此原代にも魚類を含む而して植物を含む
植物のごときも裸子類かこれに比する也古代の

動物や被子植物の化石を含む
日本にては是も大部分あるものとなす
別段に多く又新紀四代の多けれども其も
さて決して赤松しいといふ程でもなく
此新代の各層の厚さを其の層の出来た
時の年数に比例することを仮に計算し
たる結果代は弱と合致を占めること
又しかれども代を三期に分ち中古代は一期強、近代
代を僅に四十分の一にすぎず、而して石炭の
破片をとりあつめ人間のそつぎを示唆
の種をあらはすこと古代の中でも最古の

極めて高い屋だけである

過去代々の多数の墓獣の墓として

たう、化石の表面

考えられるように、ふのるとと

違ひまた人骨の石

の敵することを

まるものこと、あ

所謂の飯能

と云え狭い高うう

出さんに例う路

丘陵士の海流の内

人ぶギリレヤ国のビケンミといふ高ひ恨と

十歩のもさこるの多の足ある高うう古代の象

の類を二種、犀の類を二種、鹿の類を大きな

猫の類を一種、今のようなものを更に大きな駱

駝を一種、熊類を一種、猪、狐の

類、鹿、羚羊の類、象を二十種許り

と他の名の付けられた古代の怪獣を皆

の採集したことがあるそうなが是だけの

獣類の一部を集まるにすぎない

今日考へたに、えう見たいうる数

の獣類の数を数へたこの一種をもつる

材料となると思ふ

○化石の中に動物の進化の径路を完全に示したものを馬の化石ほど多く全体馬の歯を哺乳類中の最も多く絶えずはしくちいさくなり四足ともに大きくなり歯を一つづつ多くもつ類を次第に化れをなしてゆくものと中々複雑なるもの、種々の形をなしたる馬が多く中ごろ他の獣類をも多くおのの利あるものあり、猶ほ馬のおもなる終の世の進化の径路を完全に明らかにしたるものとす

東京博覧製

事例

ところに奇妙なことを馬類の進化の路に明らかに知らるゝ所多く解剖学的に化石を完全なる標本出でたるアメリカにあり、アメリカ人のかつてコロンブスの発見したるころ土人の馬を見ざりしその後発見するや馬の乗つたるを見て土人を半分人半分獣の怪物の来たりたと云ふ笑話もあり極東洋にあり、即ち亜米利加ヨーロッパ、ゴム輸入した馬の子孫のおもに

いづ、近古代の終りを過ぎて近世に入りたるを北アメリカから南アメリカに移るの馬の化石を挙げさせんとするにうひあり

近古代を通じての事実の初めを挙げ孤りを上中下の三部分のつかれの各化石を出ずる馬の化石を比較したるに一層毎に少しづつ変化し居る事を従ひ歩を進めて行くと終に今日の馬に似たるものに成る

東京博覧会

うる中化石を小大段々前足の指の数の化石の出たり是を推して知るに弱小の馬と見えあり実際を現今の馬の先祖と見て差支なき居を傳うて其子孫を探つて行くと終に今日の馬まで至る、其間中の数段を省けて見れば近古代の中間の中間の居る者を、既に前足の指も三本となり本四本小指大きくなり、前足の指を使ふ居所を為めるだけとなる、中間の中間に体を更に大きくなり前足後足とも指を失ひ三本となるの

[illegible]の小指の長短を弘とし[illegible]
中指の[illegible]多き[illegible]他の二ツを苦しく
小くして併し高三寸の指ともに地面を觸れた
らしい、次に上面の方を見て體を養
大きく弦を驅馬[illegible]
くして[illegible]
[illegible]
小さくして完全[illegible]
[illegible]北海の他[illegible]
最早確[illegible]
尚進んで上面の中指[illegible]

東樓原製

馬の[illegible]
大きな歩[illegible]
の二ツの指の長短を弦[illegible]
侍も苦しい現今の馬[illegible]
指を仰く強いこと[illegible]
う解[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
○見[illegible]
[illegible]

[illegible]の海岸の大森貝塚を発見し、のちにモールスをつけて、この貝の極度に厚く沢山のひあるを見て驚くべきものなりとさんこれが今日の学者の語るところを以て考えるに個体を云うて我々日人種此名前を以て呼んでいたる人種なり何時此之を名つけ[illegible]の解らないが此人種と我々の先祖である其此のり人種とが相合を交合したらしい証拠あるこの[illegible]つ[illegible]見つけ[illegible]前のこの[illegible]貝塚は空しいこの[illegible]貝塚[illegible]

[illegible]の海岸の大森貝塚の貝と現今の貝類とを比べて見ると其貝塚の貝の種類を何十種もあるが其中[illegible]数を三四種だけ選んで比較して見ると、アカガヒ[illegible]殻の表面の溝の数の著しいのに[illegible]貝塚[illegible]出した海岸の採集した標本と貝塚[illegible]出した[illegible]殻の表面にある溝の数[illegible]大分違ひ[illegible]溝の二十三[illegible]二十

四倍もあるものが貝殻のようなもの手拍十八位ようもあり、又イセエビロカヒとつて蛤を用ゐしに拾ふ貝殻あるが左右の殻の幅と長さとの割合を測つて表にしたるものの二の貝塚のものよりも多きものあるようなる、又今日のパイと貝殻のパイとを列べて両方の殻の差いと夫端の角度を測つて見たるものの方が遠う隔てゐるようなる其偶の貝殻もこんなに変化するあるようなる。

殺のの〻僅かに二千前を信んじたる貝殻の殻とかるのものとに殺したるものあるものの

あるを認めるに過ぎるものあるものもあるようなる

まるまるを知るあるものもあるものもあるいは

ように殺してあるものもあるいは

云いさるを得ず。

○進化論を生物学の研究の結果を

一種の学説をなすようなるものあるが、生物学の

いまだ解し得ざる点に進化論をふかく説

明する果実うひし難い、例へば塩分の多

寡によつて魚の大小うを飼つて

ようなる器の大小のようなる魚の大小のものうことを

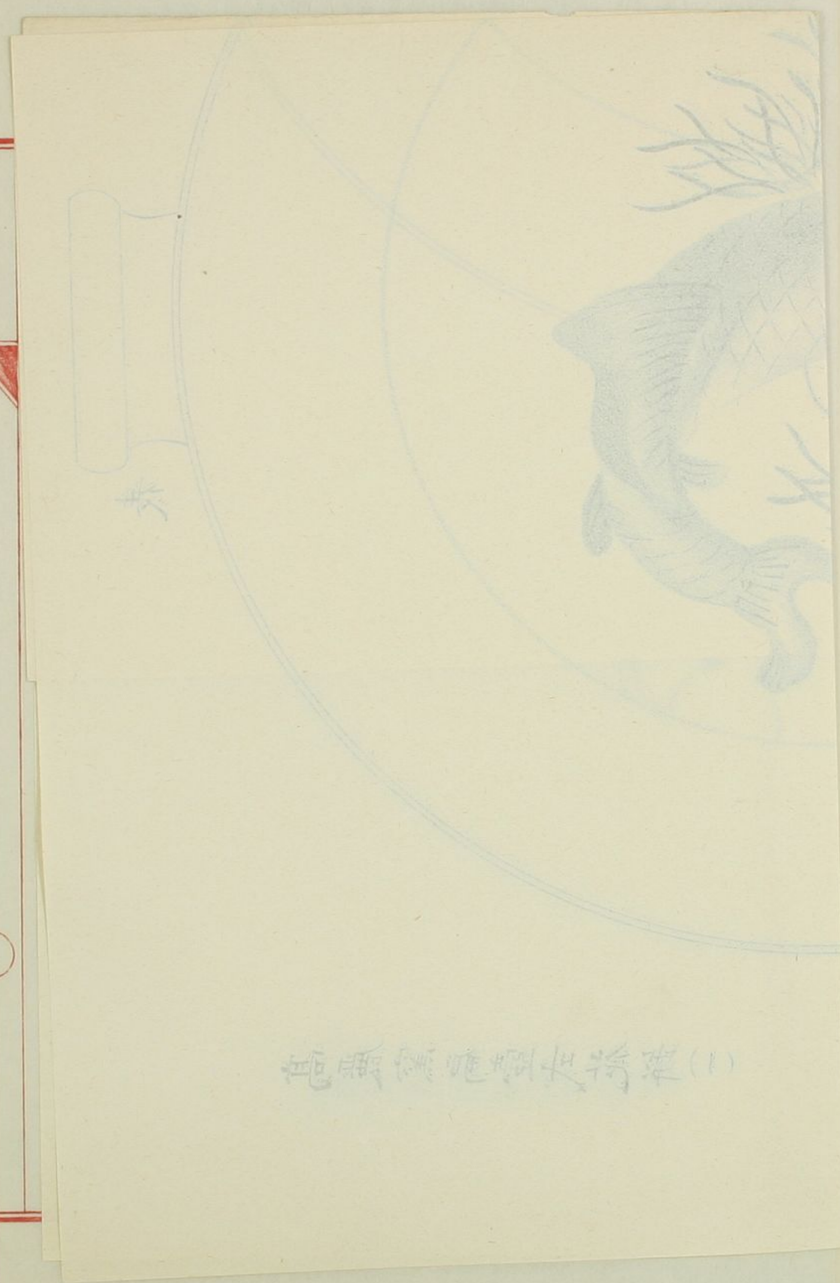
きいまだ何ものあるか解ん

とこそ
あるべし塩分のあるものは悪しく影響あ
るべきを実験上確かめたるエマシケウイッチ
と云ふ露西亜人を見るに生ずる豊年魚と東京の魚屋
つけて居る蒲焼の甲殻類を試験をしたる
其の話を聞くに、ゴク塩分の強よい
ものこのかさを動物を入れて塩分
を減じて其の標本を強したところ、あるい
其の標本う変じ別種のごときこと
るつたことである地下に塩分の多い

あるは大きく決めたるは
塩分の弱いあるは小さくまた死んだ
ばかりさくらるとこと云ふことはやがて体し此点を
いまだ充分研究づつんでゐるといふこ
とじや
又めだかの研究あるうまくの物
物を実験其身体の大きさ信濃の長さ
の比例し同一種の魚でも長い所でも大きく
生長し狭いるものを飼の十分なあつ
ても一定の大きさまでしか生長せず、ある
異日ひも湖あや池でも同じことである、実

陸ヨーロッパの或る小さな池ひとを飼ふ十分生長せ
ばこれ一定の大きさを生ずることを他の大きな
湖を移して生長させるを之れを過する
ものなるべしと
解らないのもこれ計りひとい、獅子や虎の如
ハ動物園の飼ふて居るこれ生長の為
すること既の数を之れ及しても溶長分
を充分の為すこと能はず子を生まぬ又親の
中度の数を人を飼ふを過ぎる生長せも
すること能はず移すを充分生長せも
ただ例ばこれと云ふこと云ふものの所一向

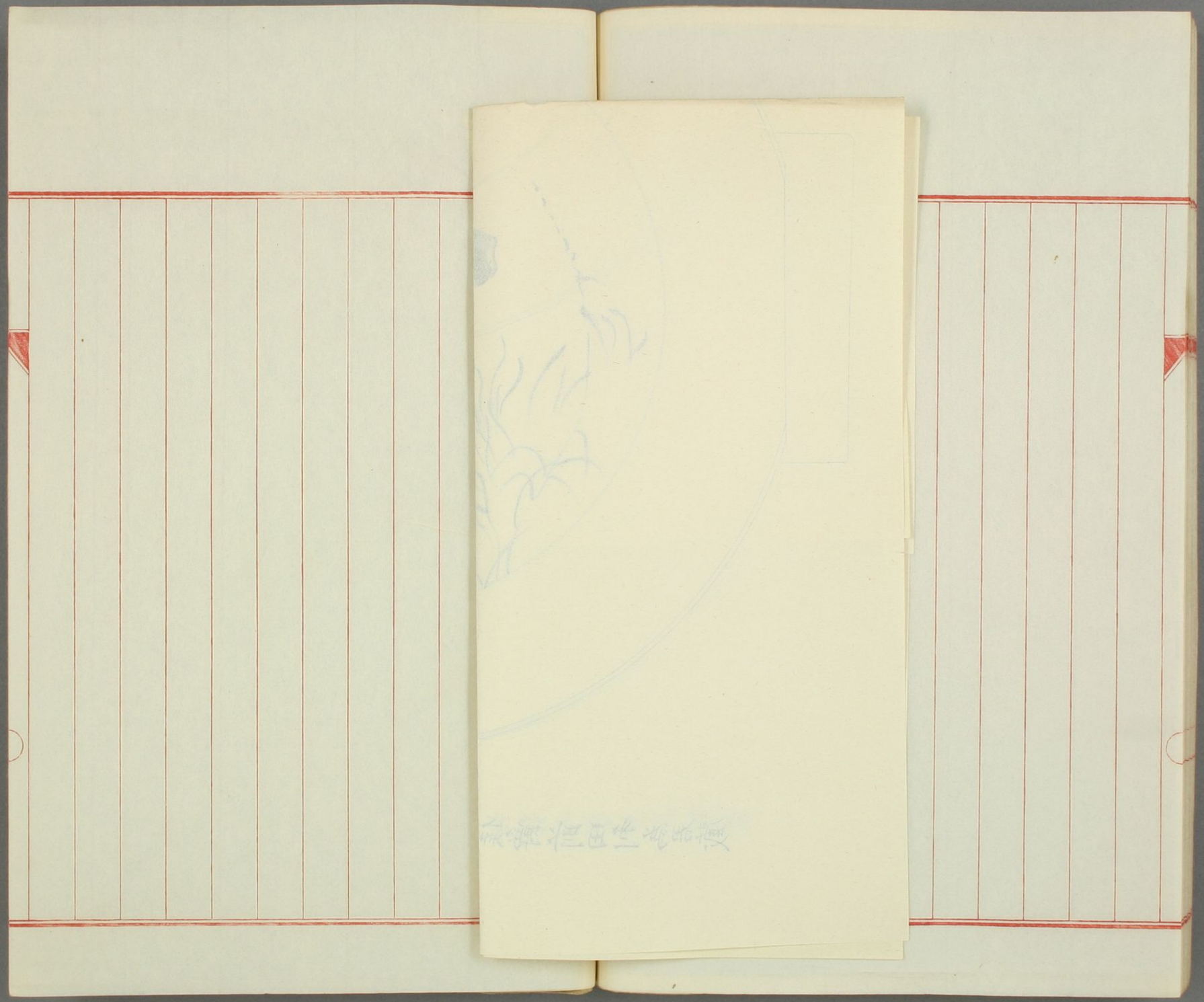
理由の解らぬ
兎と角外界の動植物の身体及び其
卵等をもつて大なることあつても、まだ甚
しく其の高味のなる枝のもつとも
まだ〳〵大分の研究を要するのみや

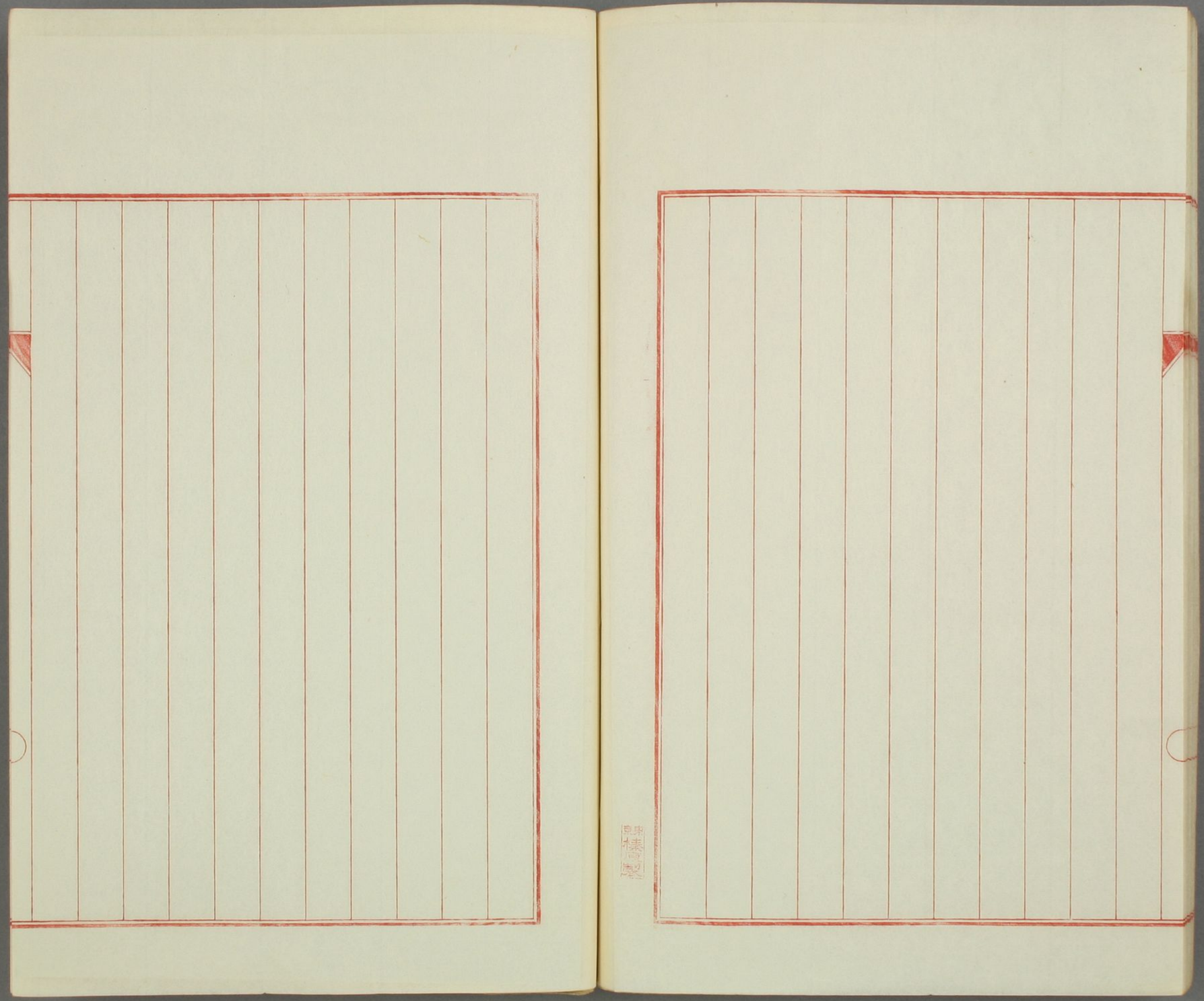


東京 棒屋製

高麗窯扁壺式花鉼（一）

侯爵前田利為君藏





以下全て

白　紙

明治三十七年
一月中浣起業
春城山人